

持続硬膜外麻酔カテーテル

再使用禁止

【警告】

<使用方法>

- 1) 硬膜外カテーテル(以下、カテーテル)挿入時に抵抗が強い場合は無理に挿入せず、挿入を中断して硬膜外針とカテーテルを注意しながら一緒に抜去し、異常が無いかを確認し最初からやり直すこと。カテーテル及び硬膜外針に異常があった場合、新しいものと交換すること。
[カテーテルが屈曲、反転、結節形成等を起こしている可能性がある。この場合、硬膜外針の刃先やアゴでカテーテルを損傷し、留置中あるいは抜去時に切断する恐れがある。(図 15 参照)切断した場合、硬膜外腔への遺残の危険性がある。]
- 2) カテーテルを抜去するときは、挿入時と同じ体位でゆっくり抜くこと。異常(抵抗)を感じた場合には、無理に引き抜かず、状況を確認し、体位を変える等適切な処置を施すこと。
[カテーテルを切断する恐れがある。切断した場合、硬膜外腔への遺残の危険性がある。]

【禁忌・禁止】

再使用禁止

<適用対象(患者)>

下記の症状が確認された患者には使用しないこと。
[硬膜外血腫、硬膜外膿瘍、または神経損傷の合併症に繋がる恐れがある。]

- 1) 血液凝固異常
- 2) 感染症(穿刺部位の感染・敗血症)
- 3) 脳脊髄疾患(脳圧亢進・潜在性二分脊椎症など)

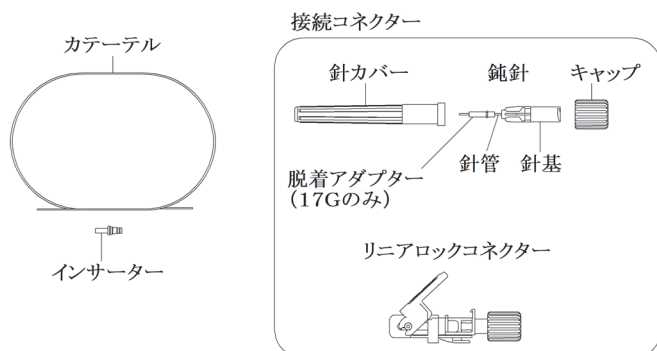
<使用方法>

- 1) 硬膜外針が穿刺されている状態でカテーテルを引き抜かないこと。また、この状態で硬膜外針を押し進めないこと。
[カテーテルを切断する恐れがある。切断した場合、硬膜外腔への遺残の危険性がある。(図 15 参照)]
- 2) フラットポイントの硬膜外針をカテーテル挿入に使用しないこと。
[カテーテルを損傷、又は切断する恐れがある。]
- * 3) カテーテルが TR 仕様は MR Unsafe であり、MR 検査は禁忌とする。その他の仕様に対する MR 環境下での撮像条件は「重要な基本的注意」欄に記載しているので内容を確認すること。

【形状・構造及び原理等】

** 本品は、カテーテルと接続コネクタの組み合わせによりなる。コネクタ部は、ISO80369-6(神経麻酔用コネクタ規格)対応品である。

** <構造図(代表図)>



1) カテーテル

- ① I: ポリエチレン
- ② TR: X 線不透過 PTFE
- ③ H: ナイロンブロック共重合体
- ④ HR: X 線不透過ナイロンブロック共重合体

2) 鈍針

- ① 針管: ステンレス鋼(ニッケル・クロム含有)
- ② 針基: ポリプロピレン

3) リニアロックコネクタ: ポリプロピレン

4) 接続コネクタは鈍針、リニアロックコネクタのタイプがある。

5) カテーテルサイズに合ったディスプレイザブル硬膜外針を使用すること。

<構成品>

構成品	一般的名称	JMDN コード
ロックキャップ	輸液用アクセサリセット	70326001
リニアロックコネクタ 鈍針	カテーテルコネクタ	32339000

* <MRに関する情報>

カテーテル種	MR 対応
I: ポリエチレン H: ナイロンブロック共重合体 HR: X 線不透過ナイロンブロック共重合体	MR Conditional 条件は「重要な基本的注意」の項を参照
TR: X 線不透過 PTFE	MR Unsafe

【使用目的又は効果】

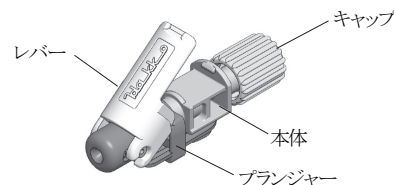
本品は、硬膜外麻酔の持続麻酔の際、麻酔液を注入するために使用する。

【使用方法等】

1. カテーテルの使用法

- 1) 穿刺部位の皮膚を消毒する。
- 2) 人差指と中指で棘上靱帯を固定する。ついで局所浸潤麻酔を行う。
- 3) 硬膜外針の刃面を患者の頭部に向け皮膚へ垂直に穿刺する。
- 4) 硬膜外針を棘間靱帯にとどめ、内針を抜去し、生理食塩水で満たしたシリンジを接続する。(loss of resistance 法)
- 5) 左手で硬膜外針、右手でシリンジを押しながら、硬膜外針を黄靱帯まで通過させる。急に右手のシリンジの感触が楽になり、生理食塩水が急激に入るところで、刺入を止める。これが硬膜外腔である。
- 6) 血液や脊髄液の流出の無いのを確認する。
- 7) 硬膜外針基部の指示マークの切れ込みが、先端刃面の向きと一致しているので、希望の向きに指示マークをセットする。
- 8) 硬膜外針の先端より約 5cm 硬膜外麻酔カテーテルを挿入する。
- 9) 体内に挿入したカテーテルが抜けないように、一方の手でカテーテルを固定し、もう一方の手で硬膜外針を抜去する。
- 10) カテーテルに接続コネクタをセットし、体内に留置したカテーテルが抜けないようにテープで、皮膚に固定する。

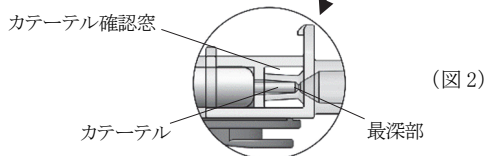
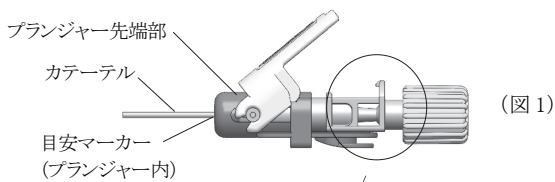
2. リニアロックコネクタの使用法



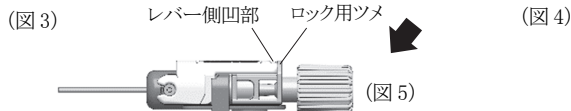
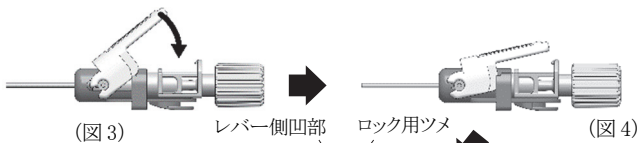
- 1) 適合するカテーテル外径 0.6~1.0mm

2) カテーテルを接続する場合

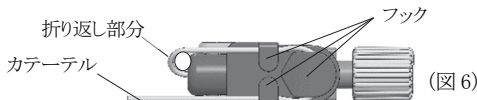
- ① ブランジャー先端部より、カテーテルを挿入する。(図 1)
この時、カテーテルの目安マーカがブランジャー内にあり、かつ、カテーテル確認窓より、カテーテル端部が本体内部の最深部付近に到達していることを確認すること。(図 2)



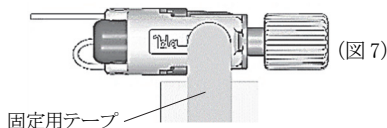
- ② テストドーズなどを目的に、カテーテルを一時的に接続する場合は、レバーを途中まで押し込んだ状態で(図 4、ハーブロック)、ロックキャップを取り外し、注射筒等の注入器を接続する。
- ③ テストドーズが終了した、若しくはテストドーズを行わない場合は、親指でレバーを押し込み、本体にしっかりと固定する。(図 3、図 5)



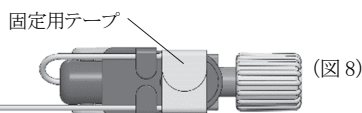
- ④ ロックキャップを取り外し、注射筒等の注入器を接続する。
- ⑤ ブランジャー裏面のフックにカテーテルをかける。(図 6)



- ⑥ 固定用テープの剥離紙(小)を取り外し、剥離した部分をレバー上面に貼付する。(図 7)

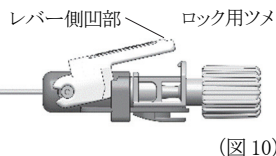
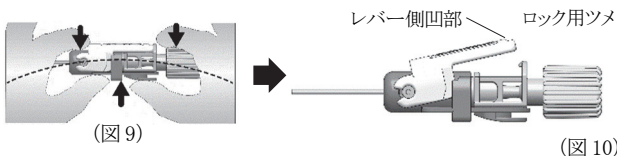


- ⑦ 残りの剥離紙を取り外し、本品に固定用テープを巻き付ける。(図 8)

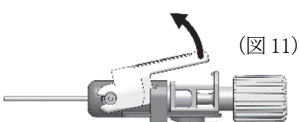


3) カテーテルの接続を解除する場合

- ① 本品全体を湾曲させて、レバー側凹部とロック用ツメの固定を解除する。湾曲させる際は、矢印の位置に荷重を加える。(図 9、図 10)



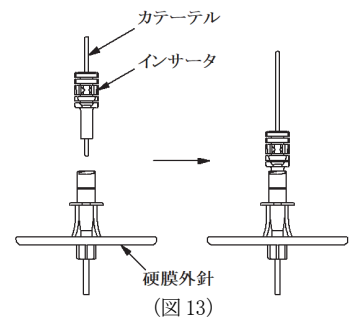
- ② レバーを引き上げる。(上側ロック機構の解除) (図 11)



- ③ ブランジャーを前方に少し引き出した後(図 12)、カテーテルをリニアロックコネクタより取り外す。

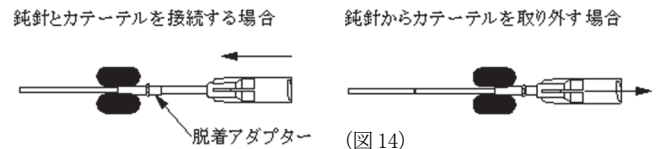
3. インサータの使用方法(図 13)

- 1) カテーテルをインサータに挿入する。
- 2) 硬膜外針の針基に接続し、カテーテルを挿入すること。
- 3) カテーテル挿入後は、取り外す。
- 4) 硬膜外針へのカテーテルの挿入が容易になる。



4. 脱着アダプタの使用方法(図 14)

- 1) 鈍針とカテーテルを接続する場合は、カテーテルとアダプタの両方を指で押さえ(図 14 の位置)、鈍針を水平にスライドさせる。
- 2) 鈍針からカテーテルを取り外す場合は、アダプタを保持し、鈍針を矢印の方向へ引き抜く。



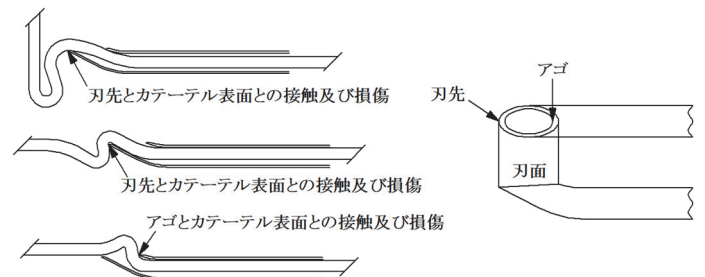
- 3) 鈍針の脱着が容易になる。仕様によっては、リニアロックコネクタ、インサータ、脱着アダプタが付属されていない場合がある。

<使用方法等に関連する使用上の注意>

1. 共通

- 1) 使用の際は、汚染に十分注意すること。
- 2) 鉗子で各構成部品を把持したり、鋭利な器具を接触させないこと。
[破損する可能性がある。]
- 3) カテーテルと結合アダプタ(リニアロックコネクタ)の接続部には力を加えないこと。
[カテーテルが結合アダプタ(リニアロックコネクタ)から外れ、汚染される危険性がある。]

2. カテーテル



(図 15) 硬膜外針とカテーテルの接触及び損傷の例

- 1) カテーテルを必要以上に挿入しないこと。カテーテルの挿入は硬膜外針先端から 5cm 程度とすること。
[カテーテルが屈曲、反転、結節形成等を起こす可能性がある。この場合、硬膜外針の刃先やアゴでカテーテルを損傷し、留置中あるいは抜去時に切断する恐れがある。]
- 2) カテーテルに接続コネクタをセットする際は、抜けないようにしっかりとセットすること。
- 3) カテーテルとカテーテルコネクタの接続部には、急激な力を加えたり、テンションがかかった状態で使用しないこと。
[カテーテルが外れる恐れがある。]
- 4) カテーテルに鈍針を接続する際は、鈍針先端でカテーテル内面を傷つけないように注意すること。
[鈍針が詰まり、流路が閉塞する恐れがある。]
- 5) カテーテルは骨部で圧迫されないように注意し、テンションがかからない状態で固定すること。固定後は感染のないように注意すること。
- 6) 留置したカテーテル及び薬液ラインの状態に注意すること。異常を認めた場合、直ちに適切な処置を施すこと。

- 7) 硬膜外針を抜去し始めたら、再刺入しないこと。
[硬膜外針の刃先やアゴでカテーテルを損傷し、切断に至る可能性がある。]
- 8) カテーテルを抜去するときは、挿入時と同じ体位でゆっくり抜くこと。異常（抵抗）を感じた場合には、無理に引き抜かず、状況を確認し、体位を変える等適切な処置を施すこと。
[カテーテルを切断する恐れがある。切断した場合、硬膜外腔への遺残の危険性がある。]
3. リニアロックコネクタ
- 1) リニアロックコネクタ内部またはカテーテル表面が濡れた状態で接続しないこと。
[カテーテルが滑って抜けやすくなる場合がある。薬液注入後にコネクタを外して接続し直す場合には、新しいものを使用すること。カテーテルは清潔なガーゼ等で乾燥させること。]
- 2) リニアロックコネクタ裏面のフックにカテーテルをかける際、カテーテルの折り返し部分には、直径 2mm 程度の余裕を持たせること。（図 6 参照）
[カテーテルがキンクすることにより、流路が閉塞する恐れがある。]
- 3) カテーテルをリニアロックコネクタと接続する際、カテーテルの目安マークがリニアロックコネクタのブランチャー内にあり、かつ、カテーテル確認窓より、カテーテル端部が本体内部の最深部付近に到達していることを確認すること。
[レバーを押し込んだ際、流路が閉塞する恐れがある。]
- 4) リニアロックコネクタにカテーテルを接続する際、レバー側凹部がロック用ツメにしっかりと固定されており、かつ、全体に歪みがないことを確認すること。
[レバーの固定が外れ、カテーテルが脱落する恐れがある。]
- 5) リニアロックコネクタにカテーテルが挿入されていない状態でレバーを押し込まないこと。
[締付ゴムが変形し、カテーテルが挿入不可になる恐れがある。]
- 6) リニアロックコネクタ使用時、カテーテルの接続を解除する際はレバーの引き上げ過ぎに注意すること。
[レバーが外れる恐れがある。]
- 7) リニアロックコネクタ全体を湾曲させる際、接続部品に過剰な負荷がかからないように注意すること。
[接続部品が破損する恐れがある。]

* 4. 鈍針

鈍針を MR 環境下で使用する際は、体表と鈍針との間にガーゼなどを入れた状態で鈍針を固定すること。
[MR の磁場で鈍針が MR 装置に引っ張られる恐れ及び火傷する恐れがある。]

5. ポリプロピレン製の構成品

テーパ一部に薬液等が付着した状態で、締め付け及び増し締めを行わないこと。
[通常より深くテーパに入り込むことで、コネクタの変形、破損を引き起こし、接合部からの薬液の漏れ、空気混入の原因となる。]

【使用上の注意】

＜使用注意＞

次の患者には原則として適用しないが、他に方法がない場合には慎重に適用すること。

- 1) 椎弓切除術の既往のある患者や、脊柱変形が認められる患者。
[これらの患者は、棘突起変形や椎間孔狭窄を起こしている可能性がある。この場合、骨にカテーテルが圧迫され、カテーテルの挿入困難、あるいはカテーテル切断の恐れがある。切断した場合、硬膜外腔への遺残の危険性がある。]

* ＜重要な基本的注意＞

- 1) カテーテルが TR 仕様以外の場合
非臨床試験によって本品は MR Conditional であることが示されている。本品を装着した患者に対して、以下に示される条件下においては、安全に MR 検査を実施することが可能である。[自己認証による]
- ① 静磁場強度 3.0T
- ② 静磁場強度の勾配 1.5T/m
- ③ MR 装置が示す全身最大 SAR (Specific Absorption Rate) 3.2W/kg (第一次水準管理操作モード)
上記条件で 15 分間のスキャン時間において本品に生じる最大の温度上昇は 0.7℃以下である。

- ④ MR 装置が示す全身最大 SAR (Specific Absorption Rate) 2.8 W/kg (第一次水準管理操作モード)
上記条件で 15 分間のスキャン時間において本品に生じる最大の温度上昇は 1.2℃以下である。
- ⑤ 本品が 3.0T の MR 装置における勾配磁場エコー法による撮像で生じるアーチファクトはない。
- ⑥ 本品の構成品「鈍針」を MR 環境下で使用する際は、磁場の影響により MR 装置に引っ張られる恐れがあるため、体表と鈍針との間にガーゼなどを入れた状態で固定すること。

* ＜相互作用＞

カテーテルが TR 仕様の場合、併用禁忌(併用しないこと)

- 1) 磁気共鳴画像診断装置(MRI 装置)

＜不具合・有害事象＞

手技に伴い、一般的な不具合や有害事象が発生する恐れがある。有害事象が発生した場合は術者の知見に基づき、適切な処置を行うこと。

- 1) 重大な不具合

- ① カテーテルの閉塞
② 本品破損
③ 液漏れ

- 2) 重大な有害事象

- ① 感染症
② 前脊髄動脈症候群
③ 全脊髄くも膜下麻酔
④ 血圧低下
⑤ 硬膜外血腫
⑥ 硬膜外膿瘍
⑦ 偶発的硬膜誤穿孔
⑧ 局所麻酔薬血管内注入
⑨ 硬膜下注入、くも膜下注入
⑩ 局所麻酔薬中毒
⑪ 尿閉
⑫ 硬膜外カテーテル遺残
⑬ 硬膜外カテーテル挿入時の血管内迷入、くも膜下腔内迷入

- 3) その他の有害事象

- ① アレルギー反応

【保管方法及び有効期間等】

＜保管方法＞

水ぬれ、直射日光、高温多湿を避け保管すること。

＜有効期間＞

箱に記載している使用期限を参照のこと。(自己認証による)

【製造販売業者及び製造業者の氏名又は名称等】

＜製造販売業者＞

株式会社八光
TEL 026-275-0121

＜製造業者＞

株式会社八光

販売窓口:

東京都文京区本郷三丁目 42-6
TEL 03-5804-8500